

## OLE型イメージデータに対する操作

本ソフトにおけるイメージデータはその作成方法により2種類に分類されます。1つは通常型でもう1つはOLE型です。ここではOLE型イメージデータについての操作を解説しています。

OLE型イメージとは

- ・OLE機能によりオブジェクトを挿入したイメージ要素です。
- ・拡大/縮小/回転して配置する事ができます。
- ・本ソフト自体に編集機能はなく、OLEサーバアプリケーションにて編集します。
- ・作画イメージを2値モノクロにして表示することができ、これによりファイル容量が節約できる。
- ・PDF保存時の圧縮形式としてFLATEとJPEGの2種類を選択できます。
- ・しきい値を設定することにより、ある色範囲のピクセルを透明にする事ができます。

OLE型イメージは通常型イメージで保持しているデータに加えてOLEアプリケーション独自のデータを保持しています。従って出力ファイルサイズは大きくなりますし、画面表示もOLEアプリケーションの描画機能呼び出す関係で、相当重たくなります。

従って、後の変更が不要と思われるデータの場合はOLE型イメージよりも通常型イメージを使用する事を推奨します。

本ソフトではOLEについての対応はOLE1レベルのコンテナ機能のみをサポートしています。つまり、他のオブジェクトを貼り付ける機能はありますが、本ソフトのデータを他のOLE対応ソフトに貼り付けることはできません。また、貼り付けたオブジェクトを本ソフトのウィンドウ内で編集することはできず、別ウィンドウが立ち上がります。この様にOLEについては最低限の機能しかサポートしていませんが、マルチページのPDFを保存フォーマットとする本ソフトにおいてはこれで十分です。

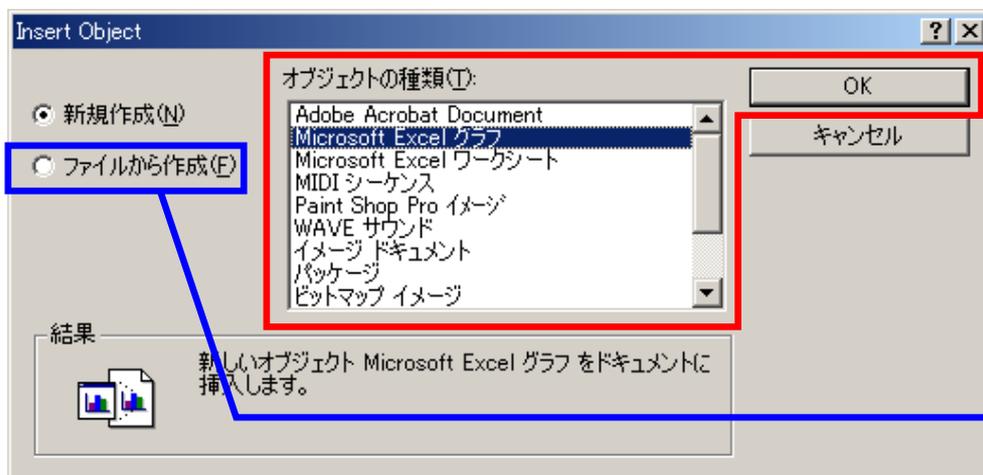
OLE型イメージを使用する事によって、OLE対応アプリケーションにおいて編集可能なPDFを作成する事ができます。例えばEXCELのグラフをOLE機能により本ソフト貼り付け、保存してPDFにします。そのPDFを本ソフトで読み込めば、埋め込んだオブジェクトをEXCELにより再編集する事ができます。

つまり、本ソフトはOLE対応アプリケーションにとって再編集を可能にするPDF変換ソフトとして使用する事ができます。

OLE型イメージの新規作成

現状は以下の方法でOLE型イメージを作成できます。

- 1) メインメニュー「挿入メニュー」の「OLE挿入」コマンドを実行して、挿入するオブジェクトを選択するか、入力ファイルを指定する。



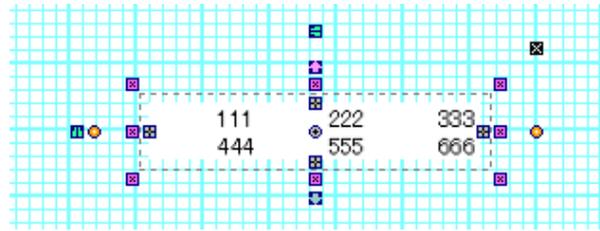
オブジェクトを選択して作成する場合は種類を選択してOKを押す

ファイルから作成する場合はこれを選択すると次の画面に移行する

(次ページに続く)



そして本ソフトのウインドウに移り、「挿入メニュー」の「OLEペースト」を実行します。



新規作成後は通常型イメージと同じく、PDF保存時の圧縮形式を設定する必要があります。図や画面キャプチャなどのイメージについてはFLATE圧縮（JPEG圧縮フラグOFF）、写真などのイメージについてはJPEG圧縮（JPEG圧縮フラグON）に設定します。

#### イメージデータの表示 / 非表示設定

イメージデータの近くに長文の文字列を配置しその文字列を編集すると、画面の更新に時間がかかり、重くなる事があります。この場合、文字列など他の要素を編集する際にイメージの表示をOFFしておく、と、重くなるのを防ぐ事ができます。

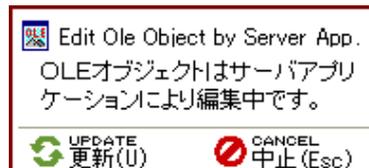
この釦または、 IMAGE ON/OFF コマンドにて表示 / 非表示を切り換える



#### OLE型イメージデータの編集



- 1) イメージ要素プロパティの「OLEデータ編集」を実行することにより、編集アプリケーションが自動的に起動され、以下のメッセージで待ち状態になります。



- 2) 編集アプリケーションでデータを編集します。
- 3) 編集が終わったら、編集アプリケーションのウインドウを閉じます。

- 4) 編集したデータで置き換える場合は更新を実行します。

